

カトリック 新潟教区報

第248号 2013(平成25)年2月1日 発行

編集・発行 カトリック新潟教区広報委員会
〒951-8106 新潟市中央区東大畑通1-656
TEL 025-222-7457 FAX 025-222-7467

二〇一三年の初めにあたって



菊地司教様

新しい年の初めにあたり、新潟教区の皆様にご挨拶申し上げます。

昨年は新潟教区の創立一〇〇周年を、十月にお祝いすることができました。教区の多くの皆様にご協力いただきましたことを、心から感謝いたします。新潟で行われた行事や教区大会も重要でしたが、広い教区のことですから、同じ行事にすべての方に参加していただくことはできま

せん。その意味で、十字架リレーは、連帯の心を強めるために大きな役割を果たしたのではないかと感じております。

さて今年私たちは、世界の教会の兄弟姉妹とともに、「信仰年」を歩んでいます。教区における取り組みに関してはすでに、年頭司牧書簡で触れました。是非書簡を読まれて、それぞれの小教区における具体的な取り組みを考えていただければと思います。その中でも、次の三つの問いかけは私にとって重要な課題です。ここで今一度記しておきます。

第一に、私たちは何を信じているのでしょうか。

第二に、私たちはどうして信じているのでしょうか。

信仰年開幕 司教メッセージ(年頭司牧書簡から抜粋)

(新潟教区は二〇一二年十月七日から二〇一三年十一月二十四日まで)

○教区の全ての皆さんに呼びかけられた重要な三つの問いかけ

第一に、私たちは何を信じているのでしょうか。

第二に、私たちはどうして信じているのでしょうか。

第三に、私たちは信じていることをどのように生きているのでしょうか。

○小教区での取り組みの勧め

1 『信仰の門―「信仰年」開催の告示』を注意深く読み、黙想する。

2 積極的に、感謝の祭儀にあずかる。

3 第二バチカン公会議文書と『カトリック教会のカテキズム』を学ぶことを通じて、「永遠の信仰をもつとよく知り、将来の世代に伝える必要」を自覚する。

4 聖書のみ言葉により一層親しみ、祈りと分かち合いを通じて内面から刷新される努力を続ける。

5 「キリスト者としての召し出しはそのまま使徒職への召し出しでもあることを、自らの言葉と行いを持って社会の中で「あかし」する。

第三に、私たちは信じていることをどのように生きているのでしょうか。

さて昨年末に私は十四名の巡礼団の方々と一緒に、はじめて聖地巡礼に出かけました。ちょうど直前にはガザで武力衝突がおり、旅行会社が軒並みこの方面への旅行を取りやめたために、エルサレムを始め聖地はどこに行ってもガラガラでした。ガイドさんによれば、いつもは一時間近くは列に並ぶようなところであつても、今回はほとんど並ぶこともなく、スムーズに旅を続けることができました。大変だったのは帰国直前の最後の荷物検査でした。うか。非常に厳しく、特に私の荷物が何度も調べられてしまいました。

聖書を通じて触れてきた様々な出来事が実際に起こった場所へ足を踏み入れ、その地の風を感じることができたのは、私にとって大きな恵みでした。

さてそのイスラエルの地にあつて、最初の日にガイドさんから教えられたのは、ヘブライ語の挨拶、「シャローム」でありました。ご存じのように「平和」という意味です。「シャローム」は、朝に昼に晩に、毎日の挨拶に使われる言葉だと言えます。日がな「平和」と挨拶をするこの地には、この六十年ほど、本当の意味での平和はなく、多くの人が生命の危険にさらされ続けてきました。その事実には大きな矛盾を感じます。

「シャローム」という言葉は、ある聖書学者によれば、「人や物事が完全な状態にあること」が本来の意味なのだそうです。ですから、それぞれの陣営が、自分の立場から考え

る「完全な状態」を追求する時、そこにはどうしても意見の食い違いや対立が生じるのです。

私たちが目指す「シャローム」は、「神の求められる完全な状態」の実現であつて、人間が考える「完全な状態」の実現ではないはずです。私たちは、当然のように平和のために働かなくてはなりません。その目指す平和は、単に争いのない世界のことなのではなく、神の「シャローム」が実現する世界です。ですから私たちは、その「神の求められる完全な状態」とは何かを探る努力をしなければなりません。このためにも、信仰年の歩みは、その探求のためによい機会となるのではないのでしょうか。

新しい年の初めにあたり、ともに神の「シャローム」を実現するために働く決意を新たにいたしましょう。



6日目 ナザレの受胎告知教会



4日目 マサダ 山の上の要塞跡

日本カトリック司教団「信仰年」メッセージ

— 信仰の恵みを見つめ直す旅に招かれて —

キリストにおける兄弟姉妹の皆さん

教皇ベネディクト十六世の自発教令『信仰の門』の呼びかけに応えて、わたしたちは全世界のカトリック教会とともに、今日から「信仰年」の歩みを始めます。

現代の日本の社会には、少子高齢化、経済の低迷、家族関係や人間関係の問題、いじめ、自死、原発問題など、さまざまな困難があり、多くの人が悩みや苦しみを抱えて生きています。ここには、生きる意味と救いを求める声なき叫びが満ちているとも言えます。その中で、信仰という尊いたまものを受けたわたしたちは、「主のもとにとどまり、主とともに生きようとする決断」(『信仰の門』10)のうちに、自らの言葉と行いで信仰をあかしするように招かれています。

わたしたち自身がどのように信仰の喜びを生きているか、信仰から来る希望と愛をいだいているかを問い直しましょう。昨年二〇一一年三月十一日の東日本大震災と福島第一原発事故は、多くの犠牲者・被災者・避難者を生み出しました。それはまた、わたしたちの信仰と生活のあり方を大きく問い直す機会にもなりました。全国各地の多くの教会や信者の方々が、信者の少ない被災地で復興支援に関わっています。少しでも支援をしたいという思いをもって現地に赴きますが、かえって被災された方々から「寄り添う大切さ」「一緒に生きる喜び」「未来への希望」を教えられる体験も数多くありました。このような体験を通じて、神がわたしたちの信仰に新たな光を与えてくださっていることを強く感じます。

わたしたちはこの「信仰年」を通して、もう一度信仰の恵みを見つめ直す旅に招かれていま

す。まず、わたしたちは祈り、神のことば(聖書)、感謝の祭儀を通して自分の信仰を深めるよう励みましょう。この信仰の道はたった一人で行く道ではありません。信徒も修道者も司祭も、そしてわたしたち司教団も、同じ信仰の道を歩む者です。互いに支え合い、励まし合いながら、謙虚さと勇気をもって新たに「信仰の門」に入っていくしましょう。

「道であり真理であり命である」(ヨハネ14・6)主イエスは「信仰の創始者・完成者」(ヘブライ12・2)であり、わたしたちの信仰の最高の導き手です。主イエスに従い、希望をもって信仰の旅路を共に歩んでまいりましょう。

聖母マリアの取り次ぎを願いながら、主イエス・キリストがわたしたちの歩みを守り導いてくださいますよう祈ります。

二〇一二年十月十一日

日本カトリック司教団



信仰年 2012 2013

「信仰年」のシンボルマークの解説

四角形で示される区画の中で、教会を象徴する船が波の上を進む。

船のメインマストの十字架とともに、

3つの帆が、キリストを表す3文字(IHS)をかたどる。

帆の背景の太陽は、IHSの3文字とともに聖体を示す。

新司教館建設

特別献金をお願い

一 献金目標額 一億円

二 献金の方法

①小教区を通して

毎月(または毎年)一定額を献金する一人ひとりの献金額は任意です。

②教区本部へ直接

一度にまとまった額を献金くださる場合は、直接教区本部へご送金ください。専用の振込用紙は小教区に備え付けています。

振込先 ゆうちょ銀行

口座記号番号

005300843589

加入者名 カトリック新潟教区

※専用の振込用紙を使用しない場合は通信欄に「新司教館特別献金」とご記入ください。

三 献金期間

二〇一二年八月十五日から三〇五年間を考えています。目標額に達したところで終了させていただきます。ご協力ください。

※二〇一二年十二月三十一日現在

特別献金実績額 一四七〇万円

献金目標達成率 一四・七%

献金へのご協力ありがとうございました。新司教館建設はいよいよ三月末の一部既存建物取り壊し工事をもって始まる予定です。詳しい献金状況、工事計画については、間もなく発行予定の新司教館建設委員会ニュースをご覧ください。

地区便り

秋田地区

(土崎教会「とんがり屋根」より)

第十九回クリスマスの夕べ

アウグスチヌス 細矢 ア

十二月八日土曜日、昨日来の荒天に灰色の空を眺める。師走の雪は当たり前とは言え、上から下へ降るはずの雪が、右から左、左から右へ舞う寒波となった。まして、昨夕には東日本大震災の余震としては最大級の震度四が秋田市でも起こるなど、出掛けるのが億劫になる条件が揃い過ぎた中での開催となった。果たして何人の方に来て頂けるのか、肅々と準備を進めながらも、不安な思いで開催の時を待つ。

定刻が近づいても目立つ空席……。ところが始まる直前には、なんと大勢の方々で会場が満員になったのです。本当に有り難く感謝の思いで一杯でした。

この「クリスマスの夕べ」は、土崎教会恒例の行事として、お陰様で今年で十九回目になりました。荒天にも関わらず楽しみに待っておられるリピーターの方々や、人伝に聞いた方々など、回を重ねて来たことで地域の皆様方始め、幼稚園や教会、多くの方々に認知されて来ていると思うと、まして有り難い限りです。

さて、第一部「光の式」は、昨年からテーマを「祈りの雰囲気の中で御言葉を味わい、共にクリスマスの意義を考えましょう。」と、「祈り」と聖書の「御言葉」、そして馴染み深い「クリスマス聖歌の合唱」へとリニューアルしました。

開場から開演までの間には、グレゴリアン聖歌が静かに流れ、また、百個以上置かれたカップロウそくの幻想的な雰囲気の中、聖書朗読、クリスマス聖歌の合唱と進んでいきました。そして、クリスマス聖歌の「来たれ友よ」の全員合唱に合わせて、イエス様を抱いたマリア様と

天使が入場し、祭壇へイエス様を安置しました。さらに天使が、「信仰」「希望」「愛」の祈りに合わせ、赤いロウソクの燭台を祭壇にそつと置くと、三つの祈りの灯りが祭壇に灯されました。

第二部「ミニ・コンサート」は、フルートの岡田恵美子氏とギター伴奏の柴田周子氏にクラシックなどを演奏して頂きました。美しいフルートの音色とギターの歯切れの良さが見事にマッチングした演奏に聞き惚れてしまいました。と言うより、引き込まれてしまいました。また、楽しいトークもあり、特に岡田恵美子氏は、実は、プロテスタント教会の牧師様、カトリックでは女性の神父様がいないので、音楽の世界から牧師への道程の話に会場全体が傾きながら話にも引き込まれていました。

土崎教会では、十二月第二週の土曜日にクリスマスの夕べを開催しています。約二週間後にクリスマスを迎えますが、キリスト降誕の意味を考えながら祈りの内に、クリスマスを迎えたと思います。神に感謝。



天使による祈りの灯の奉納



演奏する岡田さんと柴田さん

山形地区

新庄教会クリスマスミサ&パーティー

十二月二十三日(日)

クリスマスイブの前日。新庄カトリック教会には、県内外からおおよそ五十人が集まり、イエス様が生まれた日を祝いました。

ミサでは、本間神父が：「イエス様が生まれた馬小屋は私たちの心のよう。愛せない自分、自分のことしか考えられない自分のように、暗く、冷たく、ジメジメしている。でも、イエス様はそんな私たちの心」に生まれてきてくれた」と話し、イエス様に心を開いていきましよう」と語りかけました。

ミサに続いては、クリスマスパーティー。クリスマスにはフィリピンのテーブルを彩る、スパゲティやフィリピン風焼きそば、それに、マカロニサラダなど、前日に会員が作った料理がずらりと並び、みんな「おいしい」と何度もおかわりしながら、食べていました。お腹いっぱいになりながら、ゲーム。小さい子どもから大人まで、椅子取りゲームに白熱。笑いが絶



手をつなぎ皆が一つになり主の御降誕を祝った

えませんでした。そして、テンポのいい音楽にあわせて、みんなで踊ったり、町内会のリーダーの方々が、歌を披露してくれました。ことしもたくさんの人たちが来てくれたおかげで楽しいクリスマスを過ごすことができました。

来年も、皆さんにお会いできるように祈っています。



小さな十字架を先頭に入堂



マリア、ヨゼフに扮した信者が入堂

新発田地区・新潟地区

フランススコ会神父様の思い出

トマス・アクイナ 丸山 元嗣

もう、かれこれ半世紀以上も昔のことになるが、高校生の頃初めて高田教会へ行った。当時の主任司祭は小柄でむっくりした体形で陽気なサルバトーレ神父様であった。握手したグローブのような手の温もりが今も甦ってくる。聖堂の中にはウゴリノ神父様が祈り台に座って静かに祈っておられた。それ以来フランススコ会の司祭方には大変お世話になっている。同じ高校の仲間や女子校の仲間と一緒に夏は野尻湖畔のサレジオ会施設でカッターボートを漕ぎ、冬は聖堂の馬小屋つくりをし、聖夜ミサの後には幼稚園で徹夜して語り明かした青春時代が思い出される。学生時代サレジオ会の下井草教会に通い、高田教会でベルナルド神父様から洗礼を受けた。夏休みには当時未だ海岸にあった直江津教会でカミロ神父様の下で四シーズン臨海学校の手伝いをした。県内に就職して二年目に糸魚川に転勤になり三年間、当時の青海に在った糸魚川教会で月に一回夕方ミサ後、マリオ・カンドウチ（当時はタルチジオ）神父様を囲み若者達（主に女性が多かったが）と熱のこもった議論を交わしたことが思い出される。結婚式は新しく建てられた直江津教会でベルナルド神父様の司式で挙げる事が出来た。

それから半世紀が過ぎて、定年退職後、縁があつて、マリオ神父様の下で四年間高田教会の社会福祉施設の仕事を手伝うことになった。マリオ神父様の先を読む能力と経営感覚には目を見張るものがあった。フランススコ会の神父様方にはそれぞれの節目で大変お世話になりご指導を頂いた。

マリオ神父様は、私が辞めるころ体調を崩され瀬田の修道院で療養に励んでおられるが、一日も早く元気になれることを願っている。それぞれ年度は異なるが、天井に向かって説教されていたサルバトーレ神父様は十二月十二日、



高田教会前 サルバトーレ神父様と



当時の高田教会の「馬小屋」

長岡地区

謎の御像

糸魚川教会のブルーノ神父様の部屋にある二つの像の話をしたと思います。

昨年の暮にお御堂の裏の物置で、古くて汚れていた二つの木の像を神父様が見つけました。見つけるといふより、目に留まりました。特に箱に入っていたわけではなく、紙に包まれていたわけではないので、出会いだったのです。この物置は、だれでも入れる場所ですから前任の神父様たちや、信者たちにだってチャンスはありました。

この像を神父様は、捨てようと思った（物置



をかたづけられている）のですが、一つの像の目がキラリと光り手に取り少しすると、きれいな顔が出てきました。塗ってあった塗料を取り、きれいにすると親しみも出てきて新しく色を付ける事にしました。もう一つの像は、これもきれいな顔立ちで、先ほどのより細くて小さい像でした。これは、木目がきれいだったので磨くだけにしました。

神父様は、色を付けるにあたりインターネットで調べ、服装から十七世紀あたりのスペイン人を想像しマントは青色に、服はエンジ色にしました。この二人の共通点は左ひざを曲げ、左の服の裾をあげていることと右手がない事です。河に入る時に水に濡れないように捲り上げているのではないかと、神父様は話をしていました。

色を付けたスペイン人（？）は、台座があつたので細身の人もそこに乗せました。仲良く並んでスペイン人が肩をたたいてるように見えます。

神父様は、「鑑定団に出しても良いんじゃないか。」とユーモアたっぷり話していました。糸魚川教会に来られる時にはぜひ見て来てください。

【カトリック新聞オンラインのご案内】

親愛なる皆様へ

カトリック新聞社は、創刊九十周年に当たる二〇一三年一月から、インターネットの情報サイト「カトリック新聞オンライン」を始めました。

「カトリック新聞オンライン」は、従来の「カトリック新聞」をベースにした新しいサービスです。主な記事や情報は電子メールで配信する「週刊ニュースレター」（無料）でもお届けします。

情報手段が多様化する中、「カトリック新聞」は読者の皆様の長年にわたる温かいご支

援をたまわり、九十年の歴史を絶やすことなく歩み続けてきました。

しかし混沌の度を深める社会にあつて私たちは、教会メディアとしての原点に立ち返って、新しい一步を踏み出すことにしました。限られたスタッフで、しかも週刊誌を発行しながらの挑戦ですから、不備な点もありますが、一人でも多くの人に「よい知らせ」を伝え、各地の善意の人たちを結び付けていくことができるよう努力していく所存です。

「カトリック新聞オンライン」と「週刊ニュースレター」をぜひご利用ください。また、お知り合いにもご紹介ください。